

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21年 5月 27日現在

研究種目:基盤研究(C)
研究期間:2006～2008
課題番号:18520349
研究課題名(和文) 従属節における、節の内部構造と文内位置との相関に関する研究
研究課題名(英文)Correlation between Internal Structure of Subordinate Clause and Position in Embedded Sentence
研究代表者
橋本 修(HASHIMOTO OSAMU)
筑波大学 大学院人文社会科学研究所・准教授
研究者番号 30250997

研究成果の概要：

現代日本語・古典日本語について、従属節の内部構造が、母型文（主節）におけるその位置と相関を持つかどうかについて、可能な範囲でのケースワークを行い検討した。その結果、1対1の対応ではないが、従属節内部のあり方、特にテンス・アスペクトの形態・意味的あり方および述部への係り要素の一部の振る舞いが、その節が主節においてどのような位置にあるかにより影響を受ける、すなわち一定の対応があることと、その個別の実態を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語文法、意味論、従属節

1. 研究開始当初の背景

本研究申請の背景となる平成17年以前においては、国内外において、当該のような、従属節の内部構造と、それが持つ主節（母型文）における位置との相関について、明示的に指摘したものは非常に少なく、具体的なケーススタディも僅少であった。

関連する先行研究は皆無ではなかったが、上記の、（従属節における）内部と外部との

相関という論点についての明確な問題意識が薄いために、上記の問題について組織的に扱おうとする研究は南1974（とそれへの修正）以外にはほとんどなく、本研究代表者が、上記問題への取り組みが重要である旨を、橋本2003（橋本修「日本語の複文」、『朝倉日本語講座5 文法I』、2003年、朝倉書店）で述べた。

本研究は、そのような学的状況を踏まえ、着実な語法研究を先行業績として集積した

がら、不足を補った上で、従来見落とされてきた論点から新しい光を当てて従属節研究を推進するものとして企図されたものである。

2. 研究の目的

期間内に明らかにしようとした内容の概略は以下の通りである。

(1) 各種の日本語従属節の内部構造を、(従来よりも) 詳細に明らかにする。

(2) 各種の日本語従属節のとり、文全体からみた構造的な位置を(従来よりも) 詳細に明らかにする。

(3) (1)・(2)で明らかになった両者の構造を照合し、従属節に関して、内部構造と文全体から見た構造的な位置に相関があるかどうかを明らかにする。

(1), (2)については、当課題についての基礎的課題であり、日本語の各種従属節研究をさらに推し進めるものである。先行研究における成果を充分参照しながら、それらが見落とし、及んでいない領域について分析を重ね、(3)の分析に耐えうる十分な詳細さをもった記述を目指す。本研究の目的に照らした場合、先行研究の中で蓄積が進んでいるのは連体修飾節と副詞節の一部であり、欠落が多い領域は引用節・疑問節・分裂文前項等である。

(3)については、本研究は関連する諸現象を網羅的に収集・整理し、最適な理論的解釈を行う。

3. 研究の方法

大枠としては、計画・準備的分析・理論的分析・とりまとめに分かれる。研究代表者は基本的に全ての段階に関わり、連携分担者に福嶋健伸氏・川野靖子をお願いした。川野靖子氏は主としてコーパスデータ収集と高次加工・日本語教育との関わりについての検討、福嶋健伸氏は主としてコーパスデータ収集と高次加工、国語教育との関わりについての検討、および古典異本語についての分析に従事した。

研究の具体的手順としては、概略、

(1) 分析にあたっての言語学的知識・方法論の共有・標準化

(2) (基礎データのうち) コーパスデータ・会話データの作成

(3) 準備的分析としての個別従属節の分析

(4) 個別的な分析成果からの、分析重点箇所への抽出

(5) 分析重点箇所の分析および一般化

(6) とりまとめ

という形で行った。

設備として主要なものは、パーソナルコンピュータで、アルバイトを同時並行的に複数お願いするため、ノート PC を 3 台設置した。

研究補助者はこの研究において非常に重要な位置を占め、特に古典語のデータ入力には、当該古典について一定の高レベルな知識・能力を持つ作業が必要になるが、ある程度確保できた。

4. 研究の成果

(1) データ作成

基礎的部分については、非常に質の高い、古典語コーパスデータを作成できた点が成果として挙げられる。具体的には、天草版伊曾保物語の電子データを作成できた。中世語に熟達した作業員を得ることができたため、競合する電子データの中でも、より質の高いものを作成できた。

(2) 反事実条件文の主節テンス形式と意味との相関

現代日本語の反事実条件文において、岩崎 2000・金水 2001・定延 2004 等の先行研究で述べられている「運命の分岐点」概念を踏まえ、さらに上記概念の他に、主節単純タ形とテイタ形の振る舞いに関し、「主節が、話し手にとって望ましい事態かどうか」が影響している(具体的には「望ましくない事態であると単純タ形の許容をが下がる」ということを新たに明らかにした。

(3) 従属節状態表現の二面性

動詞テイル形を典型としてみた「状態(性)」には、少なくとも 2 つの側面がある。一つは<持続性: 出来事が時間的な幅をもって持続している>、一つは<内部視点性

：出来事を内部の時点から見ている>というものである。ル形（基本形）との対立や、シツツケル形の素性を考えた場合、前者の<持続性>は、必ずしもテイル形のほうにだけある性質とは言い難い。

主節単純ル形は、多くの場合現在時を指せない（原則未来時を指す）とされ、これは出来事の内部の時点から出来事を描写できないからであるとされる。一方、テイル等の状態表現は現在時を指すことができ、これは内部の時点に視点を持つためとされる（立場によりこの現象は<完成的><不完成的>という素性の問題であるという言い方もありうる）。同様に、従属節であるアト節において、テイタ形が許容されないのも、アト節内部の述部は内部に視点を持つことができないためであると考えられてきた。ところが、一部の例においては、テイル形が<-内部視点性>（<完成的>）であるように思われる場合がある。

この例外について、本研究ではコーパス調査等の結果、「明示的な期間表現の出現」「対応する単純タ形の許容度の高低」が当該例外（アト節におけるテイタ形の出現）の可否に関与していることを明らかにした。これは、特に二つの条件の総合的帰結として、当該事象がひとまとまりの（完成的な）出来事としてとらえられやすいため条件と見るのにふさわしい場合、とまとめることが可能であると見ることが可能なるという、従来の解釈を越えた知見を得ることができた（後者の条件に関わる複雑な現象も、大きく言えば対応する単純タ形の許容度が低いということは「テイルのついた形とつかない形との対立が弱化している」という意味で、「両者が明確に対立している環境でテイル形のほうの形をしている」という状況よりは、相対的に完成的な性質を持ちやすい条件になっていると見ることが可能である）。

(4) 古典語単純ル系の解釈

高山2004・福嶋2008等で得られている、古典語従属節に関する知見を踏まえ、新たに、中古語従属節において、高山2004において連体修飾節において成り立つ単純ル系とム形との対立の有り様は、従属節一般に検討対象を広げると、成立する場合と成立しない場合があることを明らかにし、成立しない場合の確例としてデータベースからマデ節を抽出した。

(5) トキの従属節というカテゴリーに入れられることの多い「まえ」「あと」節と、いわゆる外の関係の連体修飾節（その中でも相対的補充関係を担うタイプ）として扱われる「影響」「準備」を修飾する節との、共通点・相違点を検討した。その結果は、両者が共通点も持つ一方で、「まえ」「あと」節は、「影響」「準備」を修飾する連体節が（概ね連体節が一般的に持つ性質として）受ける、叙実性に関する制約・ダイクシス時詞に関する制約を受けない、という点で相違することが明らかになった。これまでは、トキの従属節の定義や、形態上「連体修飾節＋主名詞（＋助詞）」という形をとっている「まえ」「あと」節が、他の一般の連体修飾節＋主名詞から特別にトキの従属節として切り出される理由が示されてこなかったが、本研究により、上記相違点を基準に、「まえ」「あと」節を他の連体修飾節から特立的に取り出すことの根拠が得られたことになる。

(6) 従属節の特性を生かした文法教育教材についての示唆

本研究の過程で従属節の特性として、主節（単文）に比べ談話要因やモダリティ要因の影響を受けにくいいため、テンス現象・確現象については規則性が相対的に整然と抽出できる場合があることを発見し、それ

が文法教育・言語事項教育の教材探索に有益な効果をもたらすことを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1 橋本修、博物学としての言語事項教育、筑波日本語研究、13号 pp1-12、査読有、2008年

2 橋本修、日本語反事実的条件文の主節夕形について、日本語文化研究、第8集、pp404-411、査読有、2008年

3 橋本修、日本語状態表現の二面性、中日理論言語学研究国際フォーラム論文集、p18、査読有、2007年

[学会発表] (計1件)

1 橋本修、日本語学と文章教育、青山学院大学 GP、2008年12月9日、青山学院大学

[その他]

1 橋本修、「相対補充連体修飾節のテンス小考」筑波大学国語国文学会会報 27号、2007年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 修 (HASHIMOTO OSAMU)
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・
准教授
研究者番号 30250997

(2) 連携研究者

川野 靖子 (KAWANO YASUKO)
福岡女子大学・文学部・准教授
研究者番号 00364159

福嶋健伸 (HUKUSHIMA TAKENOBU)
実践女子大学・文学部・専任講師
研究者番号 20372930